

チャの安定生産や樹高抑制を目的とした整せん枝技術の品種適応性			
【要約】 秋整枝の遅延による悪影響は、‘やぶきた、さえみどり’で予備整枝によって回避できるが、‘めいりよく’では効果がない。樹高抑制のための一番茶後せん枝は‘やぶきた、ふうしゅん、おくみどり’に適するが、‘さえみどり’では減収するため適さない。			
農業技術振興センター・茶業指導所		【実施期間】	平成 29 年度～令和元年度
【部会】	農産	【分野】	戦略的な生産振興
		【予算区分】	県単
		【成果分類】	指導

【背景・ねらい】

県内の茶業経営体の規模拡大とそれに伴う乗用型管理機の普及を背景として、茶園の樹高抑制など現状に即した安定生産技術の確立が急務になっている。これまでに、整枝時期の遅延による一番茶への悪影響を回避する予備整枝技術（図 1、平成 30 年主要成果）や乗用型管理茶園の樹高抑制を目的とした一番茶後せん枝技術（平成 29 年度主要成果）を開発したが、いずれも主力品種‘やぶきた’における検討にとどまっている。

そこで、‘やぶきた’以外の品種において当該技術実施後の生育への影響を明らかにし、品種適応性を検討する。

【成果の内容・特徴】

- ① 秋整枝が遅延することで‘やぶきた、さえみどり、めいりよく’では、翌一番茶の摘芽数が明らかに減少する（図 2）。
- ② これらの品種のうち‘やぶきた、さえみどり’は、予備整枝技術（図 1）の実施によって標準時期の整枝と同程度まで摘芽数が確保され有効である。一方、‘めいりよく’では効果がみられない（図 2）。
- ③ 一番茶後せん枝（一番茶摘採面から 7cm の深さ）を実施すると、‘やぶきた、さえみどり、おくみどり’では二番茶摘芽数が減少傾向、‘ふうしゅん’では増加傾向となるなど品種によって特徴は異なるが、二番茶収量は概ね減少傾向となる（図 3）。
- ④ ‘ふうしゅん、おくみどり’では、一番茶後せん枝を実施しても翌一番茶への影響が‘やぶきた’同様に認められず、樹高抑制の技術として有効である（図 3）。
- ⑤ ‘さえみどり’で一番茶後せん枝を実施すると、翌一番茶は摘芽数の減少によって減収するため、本技術は適さない（図 3）。

【成果の活用面・留意点】

- ① それぞれの技術の品種適応性として活用できる。
- ② 予備整枝技術は上位芽優勢の強い‘めいりよく’で効果がみられなかったことから、上位芽優勢性との関連性が認められる。
- ③ ‘めいりよく’は整枝時期の影響を受けやすいことに加えて、予備整枝技術の効果がみられないことから、適正な時期に秋整枝を実施する必要がある。
- ④ いずれの品種でも、一番茶後せん枝を摘採当日に実施すると二番茶摘採期がせん枝をしない場合より一週間程度早まり、摘採 10 日後に実施するとほぼ同時期になる。

[具体的データ]

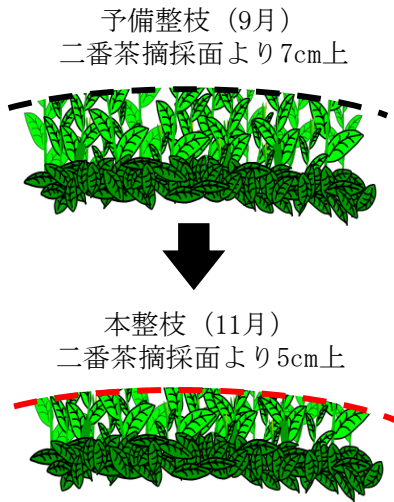


図1 整枝時期の遅延による悪影響を回避する予備整枝技術

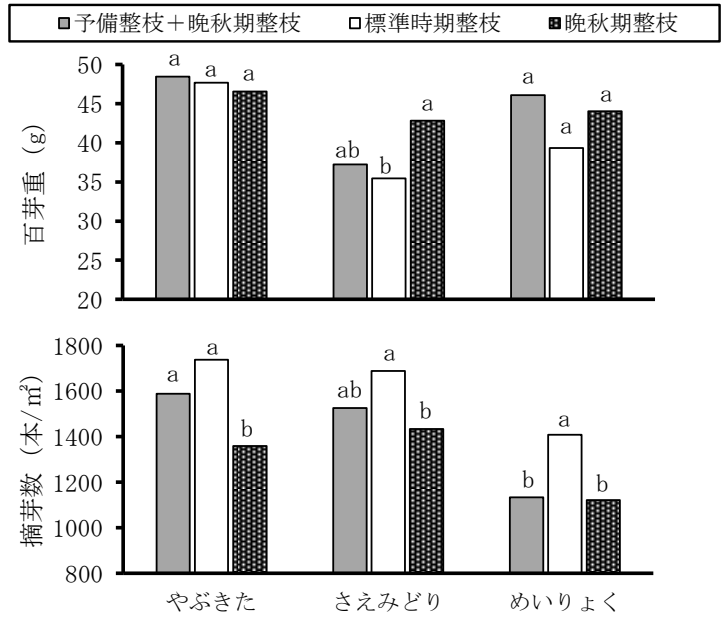


図2 秋期予備整枝が翌一番茶の新芽形質に及ぼす影響の品種間差異 (2019年一番茶)
注) 同一品種の異符号間には有意差あり (Tukey HSD 検定 5%)

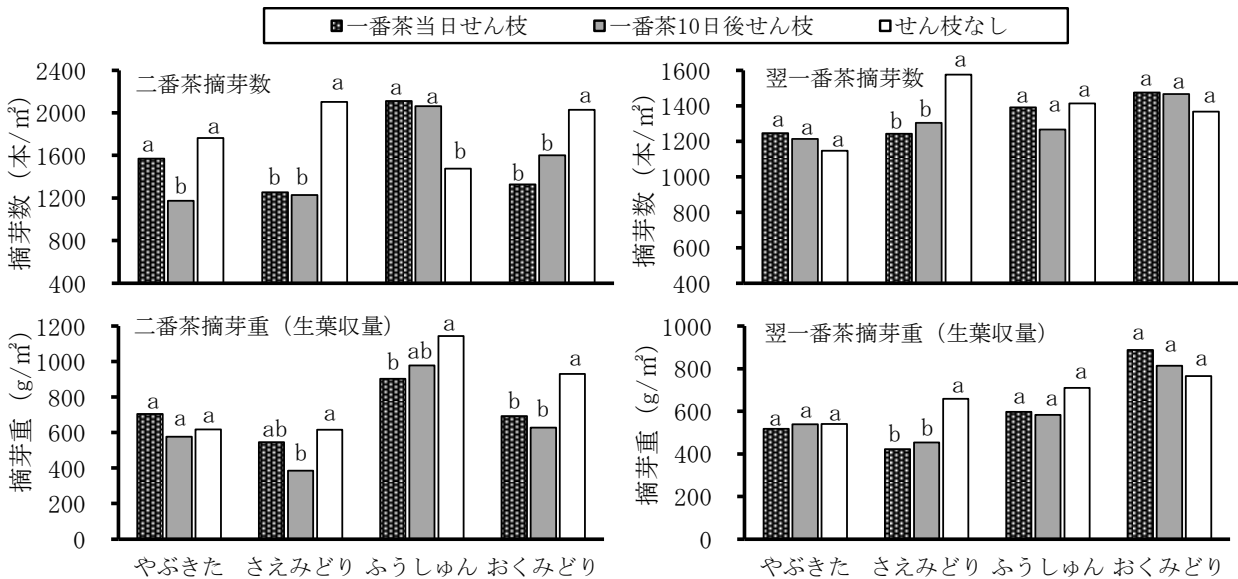


図3 一番茶後せん枝が二番茶および翌一番茶に及ぼす影響の品種間差異 (2018~2019年)
注) 同一品種の異符号間には有意差あり (Tukey HSD 検定 5%)

[その他]

- 研究課題名
 - 大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究
 - 中課題名：野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興
 - 小課題名：安定生産が図れる茶園の樹高管理技術の開発
- 研究担当者名：忠谷浩司 (H29~R1)
- その他特記事項：
 - 令和2年2月 茶研究会で発表。